

---

# 魔法少女リリカルなのは。全長30?のロボを操る少年

ロボコマンド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは。 全長30?のロボを操る少年

### 【Nコード】

N4591Y

### 【作者名】

ロボコマンド

### 【あらすじ】

この物語は、あるひとりの少年が、2人の魔法少女に出逢う物語。全長30?のロボを操り、その少年はその2人の運命を変えようとする。

果たしてその行動の果てにあるものは…

この小説は作者の処女作です。初めて書くので読みにくいし、駄文かもしれません。がよろしくお願いします！

## 第1話（前書き）

あらすじと余り変わりませんし、文字も違っているかもしれませんが  
どうぞ！

## 第1話

その物語は、1人の少年の介入で徐々に変わっていく…

ある二人の少女は「願いが叶うと言われる石」をめぐり、何度もぶつかり合う…

だが、その二人の少女の心に「あの石を使って自分の願いを叶えたい」と言う邪な心は無い…

ならば、何故その二人の少女はその石を集めるのか？

1人の少女は言う

「私は最初、助けてって言われて、その石を集めるお手伝いをしてた…でも、今は違う…私は貴女と「友達」になりたいんだ…」

1人の悲しい眼をした少女は言う

「私は、もう一度だけでいいから、母さんに「愛されたい」んだ…  
母さんが集めて欲しいって言ったから…だから、その石は譲れない」

二人の想いは交わらない…  
だが、運命は変わる…

これは、自称一般人の少年「弥生和正」が、二人の少女に出会い

その二人の少女の運命を変える物語…

## 第1話（後書き）

誤字、脱字等の指摘をしてくださると幸いです。  
次話も何とか頑張って書きます！

## 第2話（前書き）

うおお！

第1話の投稿が変になってるー！

やっぱり初めての投稿じゃ何かズレるのかな？

えっと、第2話投稿です

またおかしな箇所があるし駄文かも…

でも、見てくださると幸いです。

（第1話を書き直しました。）

## 第2話

「……と、言う訳。皆わかったかな？」

「「はい！」」

「はい…」

この場所は、海鳴市と言う市。

そして今、元気良く返事したのは子供達である。

そうここは、海鳴市にある学校の一つ「私立聖祥大附属小学校」である。

そして…

キンコンカンコン

と鐘になり、その鐘の音を聞いた先生は

「うん、丁度良く鳴ったわね。それじゃあ皆！気を付けて家に帰ってねー」

はい、と、また生徒達は先生にそう答え。

先生は、その生徒達の声を聞いた後、教室から出ていき、生徒達はそれを見送った後、家に帰る用意を個人個人でしだす。

だが、この教室で唯一帰りの用意をせず、机に、今日出された宿題のプリントを広げ、まるで答えがわかってい様な早さで、そのプリントに鉛筆を走らせる1人の少年が居た。



その少年の名は  
「弥生和正」

和正はスラスラと鉛筆を動かし続け、その結果。ものの数分で宿題は片付いた。

すると、和正が宿題のプリントを書き終えた瞬間。

バシン！！

と、机を叩く音が聞こえた。和正は、自分に無関係な出来事は無視するが、その机を叩く音がしたのは、和正の近く…というよりは、今、和正の真正面に居る人物が和正の机を叩いたのだ。

和正は、明らかに自分に起こっている出来事を、何もなかったかの様に無視し、書き終えたプリントをランドセルの中に入れて椅子から立ち上がり、そのまま帰ろうとしたが…

「ちょっと！待ちなさいよ！！」

和正の机を叩いた人物が、怒った声で和正に話しかけた。

和正はその声を聞いて、あと一歩で教室を出る足を止め、小さく溜め息を吐いた後、ゆっくり振り返った

「んん？どうした？えっと名前は確か……バーニングスだっけ？」

「違うわよ！私の名前は「アリサ・バニングス」！！いい加減覚えなさいよー！」

「あゝあ、そんな名前だったな。で？そのバニングスさんが俺に何の用？」

「アンタ、いつつも授業中に寝てるくせに、何で今日出された宿題をいつもあんなに早く解けるのよ。」

「はあ…そんな事で俺を呼び止めたのか？案外お前も子供だな。」

「なっ！？それを言うならアンタも子供で」「あゝあゝ聞こえない、聞こえない」あっ！待ちなさいよ！！」

和正は両耳を塞ぎ、そう言いながら教室を出ていき、アリサはまだ和正に何かを言いたいらしく、急いで教室を出て、廊下に出るが、その廊下の先に和正は既に居なかった……

和正サイド

俺は教室を出た後、すぐ全速力で走り、バニングスに見つかる前に階段を駆け降り、その勢いのまま走り続けて、学校の校門を抜け、その後もしばらく走り続け、俺はスタミナが切れる寸前で走るのを止めた。

「ハア、ハア、ハア…ふう、ちょっと疲れたが面倒くさい事だったからな……はあ、まあでも、流石に俺が「転生者」だなんて言えないわな」

俺はそう呟きながら、右手で後頭部を軽く搔く。

そこのお前。今俺の事

重度の厨二病野郎だっと思って思わなかったか？

残念ながら俺は本当の「転生者」だぜ。  
何？転生者ならどうせチート能力あるんだろ？見せて見るよ。だって？

まあ、見せてもいいが、今は使えない。俺が家に帰るまで待て……って、俺は誰に話してるんだ？

……まあ、いいか。  
とっ、家に着いたな。

「ただいまーあー！？！！」 俺は家のドアを開けて中に入るが、その時に俺の眼にある光景が飛び込み、俺はすぐさま靴を脱ぎ捨て、そう叫びながら俺は、ある人物から、俺の所有物を奪い去った。

「ああ！！お兄ちゃん！それ返してよー」

「駄目だ！なに勝手に俺の部屋から取って遊んでんだ！」

「むー、別に良いじゃん！お兄ちゃん、それで全然遊ばないし、お人形さんが可哀想だよ！」

ムム、痛い所を……だが！

「これは、そう言う風に遊ぶ物じゃないんだよ！だからもう触るなよ。」

「ううー！」

フツ、そんなに睨んでも、下からじゃ可愛いだけだぜ！我が妹よ！

さて…

「それじゃ俺は自室にでも行きますか。ああそれと、母さんに俺が帰ってきた事を伝えておいてくれよ「由加」」

そう俺は伝えた後、由加から取った人形？（ロボット）を右手に持ち、ランドセルを背負ったまま、自室へと向かった。

そして俺は、自室に入りつつドアのカギを閉め、背負っていたランドセルをベッドに放り投げてから、俺はドスン！と、あぐらをかいて座り、その後、右手で掴んでいた物を目の前に置き、眼を瞑り少しロボットに集中する。

そして、そのロボットへと集中を更に強めていくと、徐々に俺の全感覚が、そのロボットに移っていく感覚がしだす…

そして…

ウィーン…

先ほどまで動く気配すらなかったロボットが、急に明確な動きをしだし、そのロボットは和正を見上げて…

「ふう… 良し！「ダイブ」成功だ！」

ロボットから俺の声が聞こえた。

えっ？何が起こったか分からないって？

良し、いいぜ！教えてやる！

まず俺は転生者だ。

難しい話しはすつ飛ばすが、俺はこの世界に転生する時、神様にある能力をもらった。

その一つがこの「ダイブ」だ。

俺の元居た世界のゲームの能力で「カスタムロボ」って言うロボに精神を移させて戦う事が出来る能力なんだ。

その他にもまだ能力はあるが、それは追々でもいいか。

それと、俺がこうやってダイブしてるのは、まだ少し慣れてないから。

実はこの訓練、5年前からやっているのだが、まだ少し慣れてない。

まあ、昔に比べたら大分マシだが、まだダイブしたまま自分の体で喋る事が出来ないんだよな…

まあ、説明はこれで終わりだ！さて！！

「訓練開始だ！」

俺は言葉通りに訓練を開始した……

## 第2話（後書き）

和正は能力をまだ完全に扱えてはいません。  
訓練はしてるんですけどね〜

ゲームでは、ダイブをしてもすぐには動き回れないらしいので、自分なりにかなり難しいのかな？  
と、思っ<sup>て</sup>難易度を上げてみました。

誤字、脱字等の指摘は、してくださるとありがたいです。

## 主人公とその他のキャラ設定（前書き）

え〜と

まだそんなにキャラは出てはいませんが、  
キャラ設定です。

主人公…身体的には一般人だな…

で！でも！ダイブすれば強いんですよ！  
本当に！！

では、キャラ設定でそんなに文章は少ないですが  
どうぞ。

## 主人公とその他のキャラ設定

魔法少女リリカルなのは

全長30?の口ボを操る少年

キャラ設定

やよい・かずま

弥生和正

性別 男性

歳 九歳

髪の色 真つ黒

瞳の色 黒

身長 135?

顔の良さ 中の上(ちょっと格好いい。と言う感じ)

体重 25?

性格

性格はシンプルで、自分が既に理解、わかっている事

自分に関係の無い事にはとことん無頓着で、反対に自分に関係する事にはちゃんと対応するし、良く聞く。

面倒くさがりと辺りからは思われがちだが、結構な働き者で、勉強以外の事には良く動く。

(教室の掃除等、家の手伝い等々…)



現時点で置かれている立場

弥生家の長男で、歳の離れた姉と、二歳違いの妹がいる。

実は転生者で、神様から数個程能力をもらっている。

私立聖祥大付属小学校に通う三年生で、実はなのは達と同じクラス。学校での成績は男子三年生の中では一位（全てのテストの点は100点。和正曰く覚えているから。だそうだ）

実の所、和正はリリカルなのはの世界を少ししか知らない。（神様から少々のはらずじは聞いてはいるが、誰が何をするのか？等の細かな情報は聞いていない）

神様から貰った能力

「ダイブ」

カスタムロボに自分の精神を移し、操る力

（本来ならば、ダイブしていても元の体で声を発し、受け答え出来るのだが、和正はまだそれが出来ない）

「パーツ復元」

自分のイメージしたカスタムロボのパーツを、復元し、扱う力

（和正の一番使い慣れた能力で、ダイブ中でも発動可能。ただし、ダイブ中とダイブをしていない状態では能力が変わり、ダイブ中にこの能力を使用すると、ガンパーツを和正が頭でイメージした瞬間にガンパーツがイメージしたパーツに変わり、ダイブしていない状態なら、イメージしたパーツが手の平に物体として現れる）

「ハーフダイブ」

目が付いている全ての人形の見た光景を視れる能力

（本来は、カスタムロボにダイブしたコマンダーの残留思念を読み取る能力なのだが、神様が少し能力を変えてくれた為、こうなった。

だが、和正曰く、あまり使い道が分からない。との事）

身体能力は小学生のまま…

と言うより、何も変わっていない。

弥生やよい・ゆか由加

性別 女性

歳 六歳

髪の毛 少し茶色がかった黒髪で、背中の辺りまで髪を伸ばしている

瞳の色 黒

顔の良さ 上の中（一言で表すなら、美少女。だ）

スリーサイズ  
な〜に、それ？

体重 14？

身長 120？

性格

明るく、元気で活発な性格だが、読書も好きで、時折読んでいる本で読み方が分からない時は、姉か和正に聞きに行く。

（和正はその行為が少し可愛いと思うらしいが、和正はシスコンで

は断じてない)

置かれている立場

弥生家の末っ子

和正と同じく、私立聖祥大付属小学校に通う一年生で同じクラスの男子からは、アイドル的な存在として見られている。

不思議な行動

由加は時折、和正の部屋にあるカスタムロボを勝手に持ち出し遊んでいるが

その遊び方が少し変わっていて、その持ち出したカスタムロボで遊ばず、ただ目の前に置き、まるで誰かと話す様に喋るのだ。

更には、時折頷いたり、笑い出したりと、本当に人間と会話している様な事もする…

アリサ・バニングス

いつも授業中に寝ている和正が、何故テストや宿題を早く解けるのかが気になり、何度も話しかけて(怒鳴って?)いるが、その度に和正にはぐらかされ、逃げられている。

## 主人公とその他のキャラ設定（後書き）

主人公の設定が見にくいかもしれない…

と言うか、設定って考えるの難しい…

なんとかもう1話は書ければいいんだけど…

### 第3話

おっと、俺は和正。

とと！ちよつと今は話しかけないでく…うげ！！ジャベリン相変わらずきたねー！

しかもショットガンか！！くそ！

ガチャガチャガチャガチャ（ガチャレバ＋ボタン連打音）

よし、復帰！

ついでに後退するのが遅いぜ！

俺のボタン連打スタンガンを食ら！

ブツ…（画面？が消えた音）

はい？ てっ、おいおい！！今から俺のスタンガン連打が始まるどころだったのに何故に画面が消え…

ブン…（画面？が付いた音）

お？画面がつい…

え〜〜〜！！？

な！なんで相手がジャベリンからジェイムスンに変わって！うっ！くっ、くるな〜〜！！

「うおわ！！……えっ…夢？」

俺は危機一髪瞬間に飛び起きた。

だが、どうやら俺は、死んだ？ら夢から目覚めるオチ。で、眼を覚ましたらしい…でだ

「母さん、起こすのはいいけど、もつと普通に起こしてよ…」

どうやら、俺の夢が途中で変になったのは

俺の寝ているベッドの布団に何時の間にか潜り込み、頭を出して、

顔をニコニコさせながら

俺の体にその豊満な胸を押し付ける母さんのせいらしい。  
すると、俺の言葉に、母さんは表情を崩さずに

「ん！やつと起きた。ちょっと唸されてたみたいだけど、大丈夫？」

「だ、大丈夫、大丈夫…」

「そ！良かった。それじゃあ早く学校の用意をして、リビングに来てね。朝食を用意して待つてるから」

最後まで表情を崩さずにそう母さんは言った後  
俺の体からその豊満な胸を離し、布団から出て  
更にベッドからも出て立ち上がり、そのまま俺の部屋から出て行った。

「はあ…まあ、言われたからには行かないとな。学校に………チャ  
チャッと用意を済みますか。」

俺はそう一人で呟いた後、学校の制服に着替えだす。

実を言うと、母さんのあの行動は、ある日を境に始まった事だ…

あれは、俺が一年生の時、一度だけ学校に行った振りをして学校に行かず、

それを、待てども暮らせど学校に来なかった俺を心配してか、

俺の担任の先生が電話で母さんに伝えた事が原因だ。

その後、それを知らずに帰った俺を待っていたのは、一発の顔面ピ  
ンタと、

思い出すだけでも体が震えだす地獄の制裁だった。

まあ、その後に母さんが

その制裁を受けて体がボロボロの俺を抱きしめて

（お願いだから、心配させるような事はしないで…本当に……）

と、泣きながら俺に言ってきた事を、俺は昨日の様に覚えている。  
まあ、その後からは、俺も学校にはしっかり行っている。

（あの地獄をもう一度味わいたくは無いし…）

と、そうこうしている内に俺は着替えを済まし

ランドセルを右手で持った後、部屋を出ようとしたが、ふと、  
っだけ忘れていた事を思い出し

俺は自分の部屋の、ある箇所を見る。

俺の眼に見える物は、

自分の部屋にある横長の本棚と、その本棚の上に、ポツン…と存在  
する、一つのロボだった…

そして、その本棚の上に存在するロボの名は

「レイ」

レイシリーズと呼ばれる中の一つで、そのシリーズの初代機…

俺が「カスタムロボ」と言うゲームの中で、一番好きなロボだ。

（あつ、そう言えばもう一体居たな…）

俺は再び何かを思いだし、今度は自分が先ほどまで寝ていたベッド  
に目を向ける。

そして、そのベッドに近づいた後、その場で身をかがめ、俺はその  
ベッドの下に左手を滑り込みし、手探りで何かを探す……すると

コッソリ…

左手に何かが当たった感覚を唐突に感じ、俺は、その左手に当たった物をしっかり握った後、

ベッドの下に滑り込ました自分の左手を、そのベッドからゆっくりと抜く…

そして、俺の左手に握った物は姿を現した。

俺の左手にある物は、

レイと同じく「カスタムロボ」と言うゲーム…の、続編「カスタムロボV2」に、新型のロボとして登場した。

ストライクパニッシャー

名を「ランス」と言うロボが俺の左手に握られていた。

なぜ、このロボがベッドの下から出てきたのか？

その理由は、俺が隠していたからだ。

えっ？どうして隠していたのだった？

それは、由加にこのロボを触らせない為である。

（あまり意味を成していないが…）

由加は、何故かは分からないが、度々…いや、ほぼ毎日勝手に俺の部屋に入り、隠しているのにも関わらずこのロボ、ランスを見つけては手に取り、遊んでいる。

（何で隠している場所が分かるのかは不明だが…）

俺は一度だけ、由加が俺の部屋からランスを持ち出す瞬間を見た事があり、

その時に俺は、由加の後をこっそりつけて、由加がランスを使ってどう遊んでいるのかを見たが…



不思議、としか言い様のない行動をしていた。  
まあ、その後すぐに由加から奪い返したのだが…

おっと！つい回想に入ってしまった。

「早く用を済まさないとな。」

俺は部屋でそうポツリと呟いた後、本来の用事に戻る為、動き出す。  
まずは、左手にランスを持ったままベッドから離れ、本棚まで移動した後、  
左手のランスを本棚の上に置き、今度は、いま空いた左手でレイを掴み、  
その掴んだレイを、自分の目線の高さに合わせ、レイの目と、俺の目を見合わせる。

すると…

「アイコンタクトレジスターを再確認。キューブ形態へと移行します…」

そう機械的な音声が流れた後、俺の左手にあるレイは、その姿形を変え始め、

あっ、と言う間にレイの姿は、俺の左手に収まる程小さいサイコロの姿へと変形した。

もちろん、このレイが変形したサイコロの六面には、頭・足・背中・腹・左手・右手・の絵がその六面の一面一面に一つずつ描かれている。

（ぶっちゃけ、ゲームと何ら変わりが無い）

そして俺は、そのサイコロへと変形したレイをランドセルの中に入れ、  
今度こそ、俺は自分の部屋を出た……

和正が自分の部屋から出て、リビングに行くまで、そう時間はかからなかった。

「おはよう〜…」

「はい、おはよう 朝ごはんは用意してあるよ」

と、台所から和正にそう言葉を発するのは、

和正の母親

「弥生雪菜」

この人の外見を一言で表すなら

「超絶美女」である。

そして、その言葉を聞いた和正は、自分の朝食が用意されてある長方形のテーブルに近付き、

この家族の人数分の椅子の一つに近づいて、和正は自分の身長よりも高い椅子を引き、

背が足りないので、少しよじ登る様にその椅子に座った。

すると、椅子に座った和正の左側から、透き通った声で嫌みな事を言ってくる者が居た。

「ふう…「早く背が延びないかな〜、って考えてる？」そんな訳無いだろ、勇気」

ガッン！

と、和正が、その声を発した者に言った直後に、和正の頭に一撃拳骨を食らわすこの人物は

和正と由加の歳の離れた姉で高校2年生、弥生家の長女。

「弥生勇気」

この人物の外見を一言で表すなら

「可憐な女性」

である。

（性格は凶暴だが…）

「痛！何すんだこの外見詐欺！！」

「詐欺って！？和正！もう一度それを言ってみなさい！拳骨一発じや済まさないわよ！！」

「ああ！何度でも言ってるよ！！この外見詐欺「ガッン！ガッン！」イッ！！（痛た！）」

「……早く朝食を食って学校に行け……」

急にケンカをしだした二人の頭に、唐突に拳骨が落とされた。

ケンカをしていた二人は、その拳骨でケンカを止め、拳骨が落とされた頭を手で擦りつつ

声の主を涙目で見ると、そこに居たのは

この弥生家の大黒柱

「弥生忠成」

この人物の外見を一言で表すなら

「存在感があり過ぎる男性」である。

「と、父さん。何で私にも拳骨落としたの？」

「…最初に和正に声をかけたのは勇氣、お前だろ…」

「うう、確かにそうだけど」

忠成は、勇氣のその言葉に そう返した後、  
和正と勇氣の方に、向かい合う形で椅子に座った。

二人は、忠成に叱られた後、言われた通り食事に集中した。  
そして、数十分後…

「「ごちそうさまでした」」

和正と勇氣は、両手を合わせてそう言うのと、台所に居た雪菜がテーブルの方に来て

「はい、お粗末様でした」

と、満面の笑みでそう言った。

と、ここで和正が、ある事を雪菜に聞く。

「ん？母さん。由加は何処に行ったんだ？さっきから姿を見てないんだけど？」

「由加ちゃんなら、結構早い時間帯に学校に行ったよ。しっかりさ  
んだからね」

「あんたとは大違いね。」

「それを言うなら勇気もな…」

その和正の言葉を聞いた勇気は、一瞬、眉がピクツと動き、手を出そうとしたが、そこはグツと抑えた。

そして、聞きたい事を聞き終えた和正は、

「ふーん、分かった。それじゃあ朝食も食べたし、学校に行ってくるよ。」

そう言っただけで和正は玄関へと走って行き、靴を履いて玄関のドアを開けた。

すると

「カズちゃん！車には気を付けてねー！」

雪菜が、和正に聞こえる様に少し大きな声でそう言っただけで、

「分かってるよー、そんじゃ、行ってきまーす！」

和正も、それに応える様に、少し大きな声で言い、その後、玄関のドアを閉めた…………

だが、和正はまだ知らない。

今日と言っただけの日が、和正の運命の別れ道だとは…

### 第3話（後書き）

かなり間があいたな…

しかも、キャラ紹介みたいにな…

小説を書くのは難しいけど、なんとか頑張りたい！  
（相変わらず駄文だが…）

#### 第4話（前書き）

投稿が遅い割に駄文すぎる……しかも短い……

ダメダメだな……自分は……

それでも読んでくださる方には感謝としか言えません……

それでは、どうぞ……。

## 第4話

時刻は7時40分。

和正が家を出て、すでに10分が経過。  
ところで、その和正はと言うと…

「Z～Z～Z～」

自分のクラスの”とある机”で、突っ伏して眠っていた。

実は、和正の家と、和正の通う学校、私立聖祥大付属小学校は案外近くで、

歩けば10分位

走れば5分位で学校に着ける為

和正がすでに教室に居るのは、何ら不思議ではなかったりする。

そして、時間は過ぎていき……

なのはサイド

私の名前は「高町なのは」  
と言います。

実は、つい最近までは極々一般的な小学三年生だったのですが、  
ある日を境に「魔法少女」になっちゃいました。



フレット…えと、ユーノ君の願いで、  
願いが叶う石。名前は「ジュエルシード」と言つのですが、それを  
集めるお手伝いをしています。

あ！でもでも！しっかり学校には行ってますし、  
それに、今だつてしつかり、学校に行くためのバスに乗ってます！

「なのはちゃん。昨日の宿題はやってきたよね？」

「うん！もちろん」

「まつ！当たり前よね。あの宿題簡単だったし」

「あははは…」

相変わらずアリサちゃんは口厳しいな

あつ、そう言えば紹介するのが遅れちゃいました！

先ほど、私に最初に喋りかけてくれて、私が座って居るバスの椅子  
の、左側の椅子に座って居るのは、私の友達であり、親友の

「月村すずか」ちゃんです。

それと、宿題が簡単だったし。と、いつもの口調で言い、

私の右側の椅子に座って居るのは、すずかちゃんと同じく友達で親  
友の

「アリサ・バニングス」ちゃんです。

すずかちゃんとアリサちゃんの二人と知り合つたのは、私達三人が  
まだ小学一年生の時です。

その時の事は話すと長くなるので、今は置いて…今は仲良く談

笑中です

「そう言えば「弥生君」はもう学校に着てるのかな？」

「弥生君？あゝ、アリサちゃんと毎回言い争いしてる男の子？うーん、”いつもどおりなら”もう着いてると思うよ？」

すずかちゃんが、急に私達のクラスに居る男の子。

「弥生和正」君の話しをし出した所で、話し話題はそれになった。

「そう言えば、あいつが遅刻してきた事って無いわね……」

「うん、確かに……あれ？よく考えれば弥生君って、遅刻どころか”誰よりも早く学校に来てるよね？”」

「うーん、確かにそうよね……もしかして、学校に寝泊まりしてるのか？」

（アリサちゃん……それは無いと思うな……）

心の中で私がそう思っていると、すずかちゃんから思わぬ言葉が出た。

「弥生君が遅刻しないのは、弥生君の家と、学校との距離があまり離れてないからだよ」

「「な〜んだ、そんな事だったん……………え〜〜〜〜〜!!?」」

私とアリサちゃんは、すずかちゃんの、その発言に最初はつられてしまいました。

その後、叫ぶ様に大きな声を上げて驚いてしまいました。

バスの中での出来事なのですが、聞いた内容が衝撃的すぎて、思わ

ず大きな声を上げてしまいました…

（反省…）

でも、私達が驚く程の発言なのは確かなのです！

「す、すずか！どうしてそんな事知ってるの！？」

「え〜と、本人に聞いた。じゃ、駄目かな？」

「えっ！ちよつと待って、すずかちゃん！本人に聞いたって本当？」

「うん、本当だよ。私も、実はその事は気になってて、休み時間に”左隣の席の弥生君”に、珍しく起きてたからダメ元でその時に聞いてみたんだけど、教えてもらえたよ。」

「……あいつって、授業中は寝てばっかだし、珍しく授業中起きてても不真面目だけど、ああ見えて以外と”聞かれた事にはしっかり返す”性格なのかしら……」

「……人って見かけによらないね……」

私とアリサちゃんが、驚きすぎたせいで、最後の方は少し脱力しながらそう言つと

そのすぐ後に、私達が乗るバスは、丁度良く目的地に到着しました

………

#### 第4話（後書き）

実は、なのはとフェイトは既に一度出逢っています。（原作で言う  
と、この小説の話は、第4話と第5話の中間辺りです。）

## 第5話（前書き）

どうも、ロボコマンドです。

今回は少し早い更新です。

相変わらず駄文だし、今回の話はグダグダっぽい気もしますが、読んで下さると幸いです。

## 第5話

なのはとすずかとアリサ、そして、その他の私立聖祥大附属小学校に通う子供達は、

乗っていたバスが、学校の校門前に着いた事で、そろそろバスから出てきた。

そして、場所は学校内へと移り……

「私立聖祥大附属小学校・廊下」

廊下には既に、数十人程の生徒達が自分の教室に向かうため、歩を進めていた。

その中には当然、なのはやすずかやアリサも含まれる訳で……。

（ついでに時刻は8時）

それで、そのなのは達と言うと……

自分達の教室へと、会話を交わしながら足を運んでいた。

先ほどバスの中で話題になった話しは何処えやら、3人は既に違う話題で会話を交わしていた。

女性同士の会話はコロコロと話題が変わるが、

それは小学生の彼女達でも例外ではないようだ。

そして、会話を交わしながら足を進めていたなのは達は、数分程度で自分達の教室前に着いた。

そして、3人の中で先頭に居たアリサは、廊下側にある教室に入る為の、前後に2つ存在するスライド式のドアの内、目の前の、前の方のドアを、ガラガラ。と、音を出して開けた。そして、必然的にその教室の中の光景を先に見たアリサの目に映ったものは……

何時もと変わらぬ教室の光景……ではなかった。

「私立聖祥大附属小学校・教室内」

アリサは自分の目に映った光景を二秒ほど硬直して見た後、脱兎の如く”その光景に居た1人の人物”に近づき、パシン！！と、その者の頭を容赦ない一撃で叩き、快音を鳴らした。

その快音と、目の前にいたアリサが脱兎の如く駆け出した事に若干驚きつつ、アリサのすぐ後ろに居たなのはとすずかは、一歩踏み出して教室へと入った。

そして……

「あ……………」

なのはと同時に教室に入ったすずかは、教室内に入り、その光景を見た瞬間、思わず声が出てしまった。

なのはは、声は出してはいないが、表情が苦笑いになっていた。

すずかが思わず声を漏らしたその光景とは……

和正が”すずかの席”で、突っ伏して寝ている光景だった……

アリサに力の限り頭を叩かれた和正は、

すずかとなのはが教室に入ったところで…

「んん……ふあああ……ん？もう授業全部終わったのか？」

和正は欠伸びつつそう言い、先ほどアリサに叩かれたにも関わらず、叩かれたカ所を痛がる素振りさえ見せずに起床した。

だが、その言葉を和正の真ん前で仁王立ちして聞いたアリサは、

ドガー！！

と、今度は自分の手ではなく、いつの間にか背に背負っていたランドセルを手に持ち、

それを和正の頭にぶつけた。

「痛っ……て、何するんだよバニングス…俺はまだ何もしてな「もうやってるでしょ！この変態！！」へ、変態！！…何で”自分の席で寝てただけなのに”そんな事言われないと……」

和正は乱暴に叩き起こされた挙げ句、「変態」と呼ばれた事で、ガツクリと頂垂れるが

そんな事はお構い無しにアリサが怒り散らす



「あんだね！私にちよつかい出すだけじゃなくて、すずかにも嫌がらせするの！」

「月村に嫌がらせ？俺がいつそんな事したんだ？」

「いつって…い・ま・やってるじゃない!!」

アリサは頭に血が登っているせいか、ギャー！ギャー！と、要件を言わず和正に怒鳴り散らしているが、  
和正は、何故にバニングスが俺に怒っているんだ？と、自分が発端の筈なのに訳が判っていない。

だが、次に聞こえてきた不意の言葉に、  
和正は要件を得て……そして恐怖した……

「弥生君。そこは私の席だよ……」

と、アリサの騒ぎ声に混じって聞こえた、一際静かなその声に、  
和正は一瞬、体をビクリ！とさせた後、  
ゆっくりとその声の主に頭を向けた。

そして、和正は見た……

何時もと変わらぬ笑みを浮かべた、「月村すずか」と言う少女を……

「つ、月村…こ、これには深い訳があつて…」

(にじ〜)

「じ、実は俺も事態が飲み込めてなく……」

(にじじじじ)

和正はすずかのその言葉を聞き、少し焦りつつも二回ほど言葉を発して弁論するが、全て「物言わぬ笑顔」で対応され……

「……………すみませんでした!! すぐ! 今すぐお退きします!!」

……和正の中で何かが折れた。

和正はその言葉を発したと同時にすずかの机の椅子から即刻立ち上がり、すずかの席の左側に棒の様に真っ直ぐ立った。

すると、笑みは崩さず、すずかは和正が自分の席の椅子から退いた後、

何事も無かったかの様に自分の椅子に座った。

そして、すずかは椅子に座った状態で左側に居る和正に笑みを向けて……

「弥生君…今度からは”アリサちゃん・なのはちゃん・この教室の子達の席の椅子に座らないでね”……もちろん、私の席の椅子にもね……」

それは、和正へ遠回しに”自分は自分の席に座ってね……”と伝えるものだった。

和正は、すずかのその言葉を聞き終わった瞬間、何故か背中に、ゾクリ。と寒気が走り……

「イ…YES!! サー!!」

何故か敬礼して、軍隊の掛け声をすずかに向けて言った後……

すずかの左隣の席に着席した……

だが、和正は思う……

（何なの……このカオス……）

と……

余談だが、後から蚊帳の外になっていたのはとアリサはこう思ったらしい……

（（すずか（ちゃん）は怒らせない方がよい……）（

と……

## 第5話（後書き）

和正の運命の別れ道は次回の話です。

今回の話は…前の話の流れ的な物でした。

なのはが空気になったし、

すずかがキャラ崩壊？したかも…

次話は頑張らないと…

## 第6話（前書き）

またかなり更新が遅れてしまった…

しかめ序盤が何かあれな様な……

今回の話しは長いのですが見てくれれば幸いです。

では、どうぞ。

## 第6話

やあ…和正です…

嗚呼、窓から見える青い空に飛んで逝きたいな……………

と、まあ現実逃避はここまでにしておいて…  
俺の今の現状を語ろう。

先ほどの変な空気は既に脱し、

今はこの教室に、俺と、あの三人を含んだ十二人の生徒達が居るが…  
まあ、次々生徒が教室に入ってくるから人数を言っても意味無いな…  
(ついでに高町とバニングスは自分の席に座ってる)

それと「あの問題」はまだ解決していない。

その証拠に、俺の右隣に居る月村からは、俺しか感じられない威圧感が出ている…

(月村の表情は「もう気にしていない」といった感じだが、威圧感がそうは言っていない…)

……………と言っか

(どうしてこうなった!?)

俺は机に頭を伏せて、どうしてこうなったのかを考え出す。

(考えろ！俺の生前19歳+9歳で得た全経験を引き出して考えろ  
!!！)

俺は考えに考え抜いた結果……

(……よし！冷静になろう！)

一番思考する為に大切な「冷静さ」を取り戻した。

(これ！一番大事！)

そして、冷静さを取り戻した俺は”どうしてああなったのか？”と、あの騒動の根元を最初に考えた……って

(考える意味ねー！だって根元”俺”だもん！)

冷静さを取り戻し、改めて考えた俺に待っていた答えは……信じたくない”事実”だった……

だが、冷静さを取り戻した俺は”その事実に行き着くまでには可笑しな点がある”事を不意に思い出した。

(……いや、待てよ…確かに事実上俺は”月村の席に居て、寝た”……でも、俺の記憶が”俺は自分の席で確かに寝た”って覚えている……)

俺はその可笑しな点を思い出し、

一旦、自分の記憶を覚えている限りで全て整理してみた。

すると、この様になった。

1 俺、7時35分頃に教室に着く。走って疲れたので「俺の席の椅子に座った後、ランドセルを枕にしてすぐに寝た」

2 俺はバニングスに叩き起こされるまで「ずっと寝ていた」

3 バニングスに叩き起こされた俺が寝ていた場所は「月村の席だった」

この流れを誰かが聞けば、間違いなく……

「1の時点でもう席を間違ってるんじゃない？」

と言うだろうが、それは有り得ない。

何故なら、やっぱり俺の記憶がそう言ってるし、俺の記憶以外にも実はそう言える根拠がある。

それは……「ランドセル」だ。

俺は小学一年の時から”ランドセルをずっと枕にして寝ている”のだ  
そして、整理した俺の記憶によれば今日も例外ではない。

もし、1の時点で俺が月村の席で寝ていれば、ランドセルもセツト  
で在って当然

だが……ランドセルの在った場所は”俺の机の上”だった……

（今そのランドセルは、俺の机の吊り下げられる箇所に吊り下げ  
てある）

そして、この証拠が「俺は最初、自分の席で本当に寝ていた」と言  
う事を裏付けてくれている！

……だが

（俺が「自分の席で寝ていた」と言う事は明らかにあった。でも、  
そうなる”何故に俺が月村の席で寝ていたんだ”……）



そうなんだよな、これが一番の謎だ……

今の状況で分かっている事で推測すれば、2〜3個程疑う候補は挙げられるが…

(……やゝめた。なんか急に”この謎を解きたいっていう意欲”が沸かなくなっただけ)

最初は良かったんだがな、こんな感じ、生前の高校中退以来だな…  
普段ならこう言う謎は、答えが知りたいっていう意欲が沸くんだが…

うゝん、月村には後で親身になって謝ろう…

初めて俺に声を掛けてくれた女の子だからな…

キーン、コーン

(ん？予鈴か……何となく今日は授業を受けてみようかな…ちゃんと)

ん？おかしいな…俺ってこんなに気分屋だったわけ？

確かに人間皆気分屋だが、今日の俺は特に気分で行動するな…

何だか誰かに操られてる様なそんな感覚が……

(……まあ、月村には折りをみて謝るとして…俺は予定どおり「ダイク」するか…)

俺はやはり、予定どおりに行動する事を決めた後、意識を無くした……

和正が教室内で意識を失った後、  
ある場所では”何か動き出していた”。

ゴソゴソ、ゴソゴソ……ギイイ……

何かが動いた音が2回程した後、少しの間を置いて扉が開いた音がした。

そして、その2つの音の発生源は「下靴置き場、兼、上靴置き場」だった。

そして、その場所には先ほど下靴置き場から聞こえた、扉の音を鳴らした物（者？）が、  
下靴置き場の和正の靴が入っている場所から現れ、表に出ていた。

「うんうん、ここの生徒達は皆、予鈴が鳴る前にはこの学校に来てるから、堂々と俺が姿を現せるな」

腕を組んで、誰も居ない下靴置き場でウンウンと頷いて独り言を言うこのロボ

「レイ」は、実は和正が操っている。

「まあでも、生徒に見つからなくても、教師に見つかるかも知れないし、ささっと”あの森”にでも行きますか！」

レイが今言った「あの森」とは、この学校から1km離れた森の事を言っている。

初めてその森に（レイ）和正が行ったのは一年生の時で、それ以来、

特訓場として使っている。

そして、その森に行き、レイにダイブした和正が行っているのは、ガン・ボム・ポッドの使用訓練と、レイにダイブ時の機動訓練である。

コオオオオオ！！

レイは両の足元から火を吹き出して、その場で少しの間浮いた後、

ブオオオオ！

と、音を出してこの学校を飛び立った。

ちなみに、レイの最高飛行速度は50kmで、

ゲームの時とは違い、ずっと浮いて居られたりする。

レイ（和正）サイド

俺は学校から飛び立った後、そのまま真っ直ぐあの森に向かった。

まあでも、すぐに森に着く訳では無いから、  
しばし空の旅を楽しんだ。

数十分後……

コオオオオオ……スタ……

俺は、目的地の森を眼下に捉えた後、  
何時も通り飛行しつつ森の中程に入り、着地した。

「さて、着いて早々だが早速訓練開始だ！」

確か、昨日ここに来た時は、ボムとポッドを両方使いつつ、  
走り回る訓練をしたな……なら、今日は！

「ガンのみを使った訓練にするか！」

俺はそう言いながら右腕を上げると、  
何も装備していなかった筈の右手に、  
砲身は細長く、更にスコープが付いており、カラーは赤をベースに、  
何本かの黒のラインが入った銃<sup>ガン</sup>  
「スナイパーガン」を手に入っていた。

「よし！先ずはこの「スナイパーガン」の試し撃ちだな！」

俺はそう言った後、上げていた右腕を一つの木に向け、そして……

ズキュウウウン！！

俺の右手にあるスナイパーガンから、赤に近い桃色の銃弾が放たれ、  
それは真っ直ぐ狙った木へと伸び、そして……

コン……

と、その銃弾が木に当たった後、  
虚しく乾いた音が辺りに響いた。

え…………へボ！！

と、思ったその貴方！

これは俺が「セーフティ装置」をONにしている、  
ガンの方にも「レギュレーション」を掛けてるからこそその結果で、  
これをOFFにして、しかもレギュレーションを取り払って撃てば  
桁違いに凄いだ！

（未だにOFFにはした事無いし、レギュレーションも外した事無いけど…）

「…………まあ、何時も通りの結果に音だな…（セーフティ…OFFにしようかな…レギュレーションも…）」

とは思いつつも、俺は何時も通りにセーフティをONにし、ガンの威力もそのままに訓練を開始した……

たがまさか、俺が今日初めてセーフティをOFFにし、  
レギュレーションをも外して「何か」と戦うという事を、  
今の俺は知る予示もなかった…………

## 第6話（後書き）

和正の生前の情報が2つ程出ました。

それと序盤のあれですが、自分の頭ではあれが限界…すみません…  
（しかも駄文…）

実は、犯人は居ますが、この小説の最後の方に出ます。

それと和正が、レイやランスにダイブ中の時の表記はあの様にしました。

区間の方もあの様な感じに…

スナイパーガンの弾の表記は、V2のあれです。

現実補正にするのか、ゲーム補正にするのか迷ったのですが、やはり、ゲーム補正の方にさせて頂きました…

理由は、カスタムロボがゲームでも兵器として扱われているからです。

カスタムロボが現実で暴れて、ガンの銃弾が実際にどう見えるかは分かりませんが、

自分はこう表記しようと思います。

何か違う様な……

と思われる方は、ご感想を頂ければ、自分、考えさせて頂きます…

後書き、長くなりすみません。

## 和正ダイブ時の設定 + ロボ設定（前書き）

バトル描写に入る前に、

和正の改めた設定です。

ダイブ時の設定 + ダイブに関する細かい設定です。  
（今現在、出ているロボの紹介もあります）

見てくださると幸いです……

…後の事は、この設定を見て頂いた後の後書きで書かせて頂きます。

それでは、どうぞ。

## 和正ダイブ時の設定 + ロボ設定

和正はダイブ時はまったくその場から動けなくなる。

ゲームでは、ダイブ中でも自分の体で喋ることも出来て、喋り掛けられた時に受け答え出来るが、

現時点の和正は、全精神をロボに移してしまうので、それが出来ない。

（追々出来る様にはしようと、和正も努力している）

ゲームでのロボの遠隔操作は、自分から遠く離れれば離れる程難しくなり、

精神力もそれに伴い減少、ロボも少しずつ動かせなくなり、

最終的にはロボを動かす事が出来なくなる。

だが和正は、何故かは分からないが、どれだけダイブ中に自分から遠く離れても、

何の支障も無くロボを動かす事が出来る。

（転生前に神様に頼んだ能力のせいでは無く、和正の”ダイブ時の精神状況”が問題らしい…）

ダイブしているロボ（例・レイ等）から声を発する事が出来る。

ダイブ中の和正の視点は当然ロボを透して見るので、30cmから見える光景だ。

和正がカスタムロボにダイブをする時”必ずロボが身近になればならない”と言う訳ではない。

（実際、ロボと離れた所からでも和正はレイ等にダイブする事は可能だ。だが、離れた場所に”必ずキューブ状態”で置いて置かなければ、成立しない）



ダイブはカスタムロボにしか出来ない。（ひとつ例外有り・下記）

#### ハーフダイブ時

和正はあまり使わないが、使用した時の事をここに表記する。

ハーフダイブを使用できる物は、

眼と分かる物や、部分が付いた人形、人形のロボット。

（例は、テディベアやガンプラ、犬の形をしたロボット等）

これ等の物にハーフダイブを使用すると、和正に若干の肉体的、精神的なダメージがきてしまうが、

その人形やロボットが、目で見ていた光景を見る事が出来る。

（ただし、人形やロボットが見ていた光景は、一時間で新しい物へと変わってしまう。）

試した事はないので、現時点の和正は知らないが、実はこのハーフダイブ、リリカルなのは良く使われている「デバイス」にも使えるらしい。

デバイスに、ハーフダイブを使用すると、

そのデバイスが造られてから今現在までの記憶（データ？）が全て視れる。

（ただし、デバイスにハーフダイブを使用すると、想像を絶する程、肉体的・精神的に大ダメージを受けてしまう）

## カスタムロボ設定

### レイ

#### シャイニングファイター型 姿

青年の様な姿で、赤い頭髪のような頭部が特徴。  
念の為に全長30cmだと表記しておく。

（早い話、ゲームと何ら変わりがない）

レイは和正がレイシリーズの中で特に好きなロボで、今現在も愛用している。

#### レイ（和正）ダイブ時

ゲームだと、二回の飛行移動だったが、  
それが変わり、空中にずっと浮いて居られる様になっている。  
（因みに、レイの最高飛行速度は50kmである）

もし、和正がダイブしているロボがダメージを受けると、  
和正にその分の精神的・肉体的なダメージが返ってくる。  
（もし、そのダメージを和正が受けすぎてしまうと…）

### ランス

#### ストライクパニッシャー型 姿

レイや、他のV2時のカスタムロボとは違い、ストライクパニッシャー型は唯一機械的な姿。

このランスの姿は、  
全体的な色合いは、赤と黄色、  
左目にのみ赤い眼を宿し、腰の後部の左側にのみ、真っ直ぐ尻尾の  
様なパーツが付いている。

しつこいようだが、全長30cmである。

（これまたゲームと変わらない姿）

レイとランスは、和正が自分の能力で産み出した物で、ランスは、  
レイを出すさいのオマケらしい。

（だが、オマケに出した割りには、ダイブもしてるし、しつかり磨  
いていたりする）

何故かは知らないが、由加の遊び道具になっている。

ランス（和正）ダイブ時

ストライクパニッシャー型の一番の性能は、  
やはり「ステルスダッシュ」である。

現時点では、まだこの小説で書かれてはいないが、  
追々出す予定。

レイと同じく空中に浮き続ける事が可能。

（最高飛行速度はレイと同じ）

ダイブ時の戦い方

ゲームと同じように

ガン・ボム・ポッド・レッグを駆使して戦う。

セーフティ装置・レギュレーションが付いていると、話しに成らない程、ガンやボムが弱い…

（だが、それらを外した状態は、兵器に近い脅威になる…）

正規パーツのレギュレーションを外し、それを使用しても、違法パーツを使った様な反動がこない。

（実は、レギュレーションを付ければ、違法パーツも反動無しで扱える。性能はかなり下がるが…）

ガンやボム、ポッドの性能はゲームと同じ。

（ただし、レギュレーションを外してそれらを扱うと、ガンなら、少々だが銃弾が大きくなり。ボム・ポッドなら爆風が大きくなる）

和正の能力「パーツ復元」で、戦っている最中にパーツを変える事が可能。

（和正は、この能力に新しい何かを見いだそうと、試行錯誤しているらしい…）

## 和正タイプ時の設定 + ロボ設定（後書き）

設定、見ていただきありがとうございます。

独自解釈が混じっていましたが、どうだったでしょうか？

レギュレーションを”外している””付けている”等の表記は強調してみました。

（自分なりにですが…）

それから、正規パーツのレギュレーションを外して扱うと反動が無い。

と言うのは、自分の解釈ですが

「違法パーツはレギュレーションも外し、更に正規のパーツ以上に性能がありすぎる、だから反動がコマンダーに返ってくる。」

と、自分は思いました。

なので、正規のパーツのレギュレーションを外して扱っても、根本的な性能は変わらないので、大丈夫だと自分は思いました。

こんな独自解釈をして

しかも駄文な作者ですが、

これからもこの小説を見てくださると、本当にありがたいです。

観想や指摘、誤字や脱字なども、して下さいありがとうございます。

## 第7話（前書き）

また更新が遅いロボコマンドです。

今回の話は、

この小説初の戦闘描写！

ただ、ちょっと……いや、

かなりグダグダ感があるような……

更新遅い割りにはクオリティーが無さすぎるこんな小説ですが、

見て下さると幸いです。

## 第7話

レイが訓練を開始して一時間程が経過……

所で、そのレイにダイブした和正はと言うと…

「うおおおお！何だあの「化け物」は〜〜〜!!」

と、絶叫しつつ「ある何か」から全速力で逃げていた。（短い脚で懸命に…）

どうしてレイがこの様な事になっているのか？  
それは、現状から少し時を遡れば分かる…

レイ（和正）サイド

俺は木に一発、弾を当てたあの後、  
スナイパーガンで、木に生い茂っている葉っぱを一枚一枚射ぬく…  
と言った威力も無いので、  
どちらかと言うと、弾を葉っぱに当てて、  
木から散らす。と言った事をしている。

「うゝむ、ここに着て、この訓練を開始して早2年とちょっと。もう精密射撃はお手のものだな」

確かに、精密射撃は初めの頃より上手くなった。

最初はまゝ酷かった酷かった…

ホーミングしないガンは、訓練しないと使えないのにはちょっとビツクリしたが、

今ではこの通りに使えてる。

（この森に来る前は、訓練を家か手頃な空き地でやってたが、あまり集中出来なくて上達しなくてな…）

「さて、それじゃ、次のガンはガトリングガ…」

俺がスナイバーガンを使用した訓練を切り上げ、次のガンに変換しようとしたその時。

俺の視界に突如、蒼い光りが一面に展開された。

「うつ！ なつ、何だ！ 今の光りは？」

俺は、眩しい蒼の光りが眼を刺した瞬間に、

反射的に左腕で眼を覆ったが、それでも微かに見えていた蒼の光りが数秒程で消えると、

左腕を下ろし、その蒼の光りが放たれた場所を見ようとしたが、それは、いつの間にか俺の目の前に居た…

”（多分）全長200cmのカマキリ？” によって阻まれた…

と、あの様な事がレイに起き、現在に至る。 と言う訳だ。

そして、その追いかけて回されているレイは…

「……………よし、何とか撒いたか…」



レイは、あの巨大カマキリの追跡を、  
木の上の、往く重にも木から枝分かれして伸びる枝の中に隠れ、  
あれをやり過ごしていた。

「しっかし今の”カマキリみたいな奴”は何だ…体は黒いし異様に  
大きい、しかも鎌みたいな所が包丁以上に切れ味がある……」

レイにダイブしている和正は、先程まで自分を追いかけて回っていた  
あの化け物カマキリの事を、  
先ほどとは打って変り、冷静に考えながら呟いていた。

「そう言えば、アイツから逃げてる途中に地上設置型のポッドを試  
したが……やっぱり威力が無さすぎてダメだったな……」

と、どうやらあのカマキリから逃げている途中に、レイは攻撃を仕  
掛けた様だが、  
あまり意味をなさなかった様だ。

「あの化け物カマキリ、まだ近くに居るのか？まあ、そうだとし  
ても、ここはすぐには見つからない筈だ。今の内にセーフティとレギ  
ュをOFFに……」

レイは、今度はあのカマキリに攻撃が効くようにと、自分と、自分  
のパーツに掛けてある制御を外そうとしたが…

レイが隠れていた枝が

「レイの後方から」の、同時の二撃の斬撃によって切り落とされた…

レイ（和正）サイド

「……今の内にセーフティとレギュをOFFに……」

俺がそう言った直後だった…

”あれ”が来たのは……

俺は次の瞬間”誰かに軽く背を押された感覚”と同時に、浮遊感に襲われた。

俺は何が起こったのかが分からず、

ただ、浮遊感を味わったが、

その浮遊感は唐突に無くなり、

今度は硬い何かと正面からぶつかった。

俺は、その硬い何かが地面だと分かるのに数秒要し、

うつ伏せで倒れていたとも分かった俺は、ゆっくり立ち上がり。

俺はその後、後ろに振り向いた…

そして、そこに居たのは”俺が降りきったと思っていた、あの化け物カマキリだった”

俺がそうやって立ち上がり、ソイツを見上げた後、

そのカマキリは自慢の鎌をゆっくり上げ、

そして、間髪入れずに俺に向かって鎌を振り下ろした。

「何で俺の居場所が分かったかは知らないが、そんな鎌ぐらい簡単に避け……！??」

（な！？動けない！？不味い！！）

俺は何故か動けず、そして動かなければ当然迫るはあの鎌…  
だが……

（……あ、危なかった……）

俺に迫ってきたあの鎌は、俺を仕留めず

俺の真ん前で二つの鎌が地面に深々と突き刺さった。

そして、俺はこの状況を好機と一瞬で思い、

後先考えずに俺は……

「セーフティ！レギュレーション！OFF！！変換！ガトリングガン！！」

俺は冷静さの欠片も見せず、ただそう叫び、そして

使用しない場合は砲身を隠している褐色の蓋らしき物が今は外れ、

細長い砲身が露になり、

その砲身は円形に四本並び、

色は緑、砲身は灰色をした銃<sup>ガン</sup>を

カマキリに向け弾を放った。

弾は目視でき、色は黄色。そして、ガトリングガンから発射された  
弾の数は八発……

一発はカマキリの頭を吹き飛ばし……

八発中の二発は、カマキリの鎌がある部分を吹き飛ばし……

残りの五発は、全てカマキリの体に大きな風穴を空けた…

カマキリは、その弾を受け絶命…力無く崩れ去った…  
そして、俺は

「こ、こんな威力だったのか…」

俺はガトリングガン撃った後、冷静さを取り戻し、  
衝動的とはいえやってしまった事を確認した。

俺の眼に映っているのは

頭が吹き飛び、体にも穴が五カ所空き、自慢の両鎌も無い変わり果てたカマキリの姿があった。

うーん、これはちょっと…

（化け物だったとは言え、やり過ぎてしまった…しかもこれ程の威力とは…）

俺は変わり果てたカマキリを見ながら、

少しやり過ぎたと、心の中でカマキリに合掌しつつ、

威力が強すぎた事に驚き、今後の扱いを考えようとしたその時、

急に、俺がダイブしているレイの体が、糸が切れた人形の様に膝から崩れ落ち、

そのまま、パタン…と、体がうつ伏せ状態になった。

「な…何だ…体が動か…これじゃさっきみたいじゃ…駄目だ…意識が…」

俺は、訳も分からぬまま、そこで意識が消えた……

## 第7話（後書き）

「戦闘描写短い!!」

自分でも思います！

（作者が言ってどうすんだよ……）

初の戦闘描写は短かったです、

レイのパーツの凄さは分かって貰えたかと！

それと、レイが倒れた理由は次話で分かります。

そして、次話で遂にあの人が！

## 第8話（前書き）

先に言っておきます…表現力無くてすみません…

しかも無理矢理感が否めない…

それと、今回の話なのであの人が出ますが、性格がちょっと変わってます。

こんな話ですが、最後まで読んでくだされば幸いです。

## 第8話

レイにダイブしていた和正が、  
原因不明で突然気絶してから約十分…

”ある反応”を見つけ、この森にやって来た1人の人物がいた…

??? サイド

私は今しがた”ジュエルシールド”の反応を見つけ、  
反応があつたこの森に飛翔してやって来た…

「バルディッツシュ…この辺りだよね…」

《Yes Sir!》

私が右手に握っている、  
全体が黒く、

先端に斧状の物が付き、

その先端の中段に、金色のクリスタルが埋め込まれた棒状の物に、  
私が言葉を掛けると、

その棒状の物は、先端に埋め込まれている金色の玉を点滅させて  
機械音を発し、そう返してくれた。

私が手に握っている黒い棒状の物の名は

「バルディッツシュ」

この子は、私に魔法の基礎と、その魔法を使った戦い方を教えてく



れた「リニス」と言う使い魔が、  
私専用につてくれた”インテリジェントデバイス”…  
私に力を貸してくれるパートナーだ…

(……………見つけた……………)

私は、バルディッシュに確認の言葉を取った後、  
もしかしたら戦闘になるかも…、と辺りを警戒しながら森を歩いて  
いると、

木々の間から”強い蒼の光”が漏れ見え、  
私は、自然と足早になる自分の脚を抑え、  
警戒しながら、その蒼の光が見えた場所にゆっくり歩を進めた…

そして、私の眼に映ったのは…

「”ジュエルシード”……………」

私は宙に浮いている、蒼の光を放つその小さな石を見つけて眩くよ  
うにそう言った後、

足早になっていた私の脚の抑えは消え、

私はその脚で、その宙に浮いた蒼い石に近づいた後、

「ジュエルシード・封印……………」

私は、手に握っているバルディッシュの先端にある斧状の部分を、  
宙に浮いているジュエルシードに真っ直ぐ向けてそう言うと、

ジュエルシードは、バルディッシュの金色のクリスタルの中へと入  
っていった…

「回収確認……………ふう……………」

ジュエルシードが無事に回収できた事で、  
私は警戒を解いた……すると…

(……………？足下に何か堅い物が…)

私が警戒を解いたすぐ後に、  
私は足下の感触に違和感を感じ、  
顔を足下へと向けると、そこにあつたのは…

小さな赤髪の人形？だった…

「あつ！ご、ゴメンね！踏んじやって！」

私はそう慌てて言いつつ、その人形？の上から退く……が

(……………あれ？私どうして謝ったんだろ？)

と、退きながら私はそう思い、  
私はその人形？の上から退いた後、  
暫しその人形？を見つめ続けた…

(……………何だろう、この人形を見ると、不思議と動くんじやないかって思えてくる…)

赤い髪？に、  
見れば見るほど、人形とは見えなくなる顔立ち…  
それに、何でかは分からないけど、人を見てる様な感覚も段々して  
くる…

（……………あつ！もしかして”小人”なのかな……………でも、うゝん…  
本で見たことはあるけど、あれは確か”空想上の存在”だった様な  
…）

私は一瞬”小人”と言うフレーズが頭の中で出てきたが、  
それは無い。と、私は頭の中で出て来た言葉を否定した。

そして、私はまたこの人形？の事について考えようとしたが、  
それは、私が右手に握っていたバルディッシュからの音声で止めら  
れた…

《生命反応・無し・魔力反応・無し・構造・機械》

私は、バルディッシュから発せられた急な音声に、若干の驚きはあ  
ったが、

発せられた音声は一言一句聞き逃さなかった。

（やっぱり生きてる者じゃ無いか…でも、人形じゃなくて、機械な  
のには驚いたかな…）

私は、バルディッシュからの情報を疑わない。  
バルディッシュは、普段は全然喋らないけど、  
こうやって私が困っている時や、分からない事に直面してる時は、  
さりげなくだけど、私に的確な助言をくれる。

私は、バルディッシュからの情報を聞き、  
この人形…じゃなかった！ロボットは、元からここにあった物（捨  
てられた物）だと推測した。  
捨てられた物。と言う言葉が引っ掛かるが、  
私は捨てられたロボットから視線を外し、

”移動魔法”を発動させて、この場所から翔び去ろうとした…ただけ  
ど…

(……………やっぱり、見捨てられない…)

私は、どうしてもあのロボットの事が頭から離れず、  
捨てられたあのロボットが、これからはずっと一人ぼっちで居るの  
かな…と考えてしまい、  
気づいたときには既に、私はそのロボットを両腕で抱き締めて、空  
に飛翔していた……………

「海鳴市・とある高級マンション」

ガチャリ。

と、この高級マンションのある階のドアが開き、  
そのドアを開けた人物は、家の中に入った後、  
少しだが、大きめの声を発した。

「アルフ…帰ってきて「フェイト」……!!」ア、アルフ…苦しいよ  
…」

フェイトと呼ばれる、

腰まで届く長い金髪の髪を、二つの黒いリボンを使いツインテール  
にした少女が、

この家に帰って来て「アルフ」と言う者の名を口に出すと、  
家の奥の方から凄いスピードで、名を呼ばれた者は現れ、

そして、そのままのスピードで、自分の名を呼んだ者を抱き締めた。  
ただ、少し抱き締める力が強かったのか、  
フェイトと呼ばれる少女は苦しそうにし、

アルフと呼ばれる、  
オレンジ色の髪を、背中より下まで伸ばし、  
何故か両耳が犬耳で、下半身の後ろ辺りには、犬の尾も付いている  
女性は、  
その声を聞いて少女から体を離れた。

「ああ…ごめんよ、フェイト…でも”勝手に居なくなったら”心配  
もするさ…」

「ゴメンね、アルフ。今度ジュエルシードを探しに行く時は、一緒  
に行こう」

「分かってるよ！そんなときや任しといて！」

「うん！」

と、2人は玄関前でそう話した後、  
家の奥にあるリビングへと向かった。

そしてリビングへ着くと、  
2人はリビングにあるソファに腰掛けた。

すると、あの玄関前で話し終わった後に気になった事を、  
アルフと呼ばれる女性が、少女に聞きだした。

「ねえ、フェイト。さっきから気になってるんだけど…その抱いてる物は一体なんだい？」

「ああ…えっと、これはねアルフ………」

少女は森で拾ったロボットの事に付いて説明した。

「へー、そんな事があったのかい…でも、どこからどう見ても人形にしか見えないけどね」

「うん、私も最初はそう思ったけど、バルディッシュが調べてくれたから間違いないと思う」

「バルディッシュが？まあ、それならそうなんだろうけど「うつ！」「！！フェイト！どっか痛いのかい！！今唸り声が…」」

「???うつうん、どこも痛くないよ？それに私、声も出して無いよ？」

「えっ！？そ、それなら今の唸り声はどこから…」

アルフと呼ばれる女性は、ソファーから立ち上がり、リビングを見回すが、彼女が見ている場所とは見当違いの場所から

……

「うつ…うつ…うつ…うつ…うつ…うつ…うおおおお！！！」

と、突然意味不明の叫び声が上がった…

レイ（和正）サイド

「……はっ！敵は！メイジェルは何処に！？……てあれ？ここどこ？森じゃない？カマキリは？元の体じゃない？何故に縛られてる？そしてあんた等誰？」

はい…現状が全く掴めない和正です。

と言うかここ何処？確か俺は急にレイが動かせなくなって気絶を…でも何で急に気絶？……あ…もしかして”精神ダメージ”が原因か？

でも、何時攻撃を受けたんだ？……いや、今は考えるのは止めよう…  
う…  
だって…

「光の刃をこちらに向けなくてくれ…地味に怖いから」

「……………」

こんな状況だし…  
しかも言葉が返ってこないし…  
と言うか、この光りの刃なに？  
この縄も何故に光ってる？

「…あんた何者だい？」

急に話しを振るなって…  
と言うか、何者って…こっちが聞きたいよ…

それから、あんたコスプレは止めなよ。  
いい大人が犬耳は駄目だって、美人でも……  
……何者って聞かれたんだよな？なら……

「何者…… ロボットだ「バシイイ！」」かず……いや、レイだ……」

拳を撃ち合わせちゃ駄目だって……

一瞬俺の名前を言いそうになったよ……

……ふざけちゃ不味い空気なので、ここは素直に従うか……  
(脅しに屈した訳では無いからな！)

「そうかい……レイって言うのかい……それじゃあズバツと聞くけど、あんたは”時空管理局”が開発した”新型デバイス”かい……」

時空管理局？

デバイス？

聞いた事すら無い言葉だな

逆にその事について聞きたいくらいだ……

まあ、でも今は……

「デバイスって奴がどんなのか知らないが、そんなのじゃない。それに、その二つの言葉も聞いたことが無いが？」

と、偽りなく返してみた……

ん？長いな沈黙。

嘘は言っていないぞ……

「それなら、何で”ジュエルシード”のあつた森に居たんだい……」

さっきの返答は信じて……くれたのか分からないな……



それにしても…

”ジュエルシード”…

聞いた事は…あるな…

確かそのフリーズだけは、神様から聞いた事がある。

（詳しい事は聞いてないけど…）

ん、まあ、細かい詳細は知らないので、知らないという方向で答えるか…

「ジュエルシードとやらも聞いたことが無いし、見たこともないが？」

「……森に居た事は…」

……この金髪少女は細かい事を聞いてくるな…

ちょっと試しに……

「言えない。と言ったら…」

「貴方をこのまま帰すわけにはいかない…」

だよな…

さて、どうしたものか…

多分、この金髪少女は騙せない…

かといって、この正体不明の光る縄を引きちぎってガン・ボム・ポッドを使って大暴れ…は無理（と言うより嫌だし）

……しょうがない。

俺が現段階で知っている事を駆使して、この空気からは脱しなければ

ば…

じゃないと、俺としても最悪な結果になるからな…

（レイをここに残してダイブを解くとか…）

よし、まずは話しの流れだ！

「なあ、アンタ等が俺を逃がしたくない理由ってのは、話に出てきた、その時空管理局の新型デバイスなんじゃ… っるのが原因なんだろう？」

（コクリ…）

「それだったら、さっきの返答で分かったは「それでも信用出来ない…」………」

……… はあ、月村の時と言い、  
化け物力マキリには遭遇するといい、今日は俺の厄日か…

まあでもこれで、疑われてる原因は分かったな。

それなら…

「……… そんなに俺の事が信用出来ないなら”俺の本来の体”に会えばいい。その、時空管理局… だったか？ 名前からして組織だと思うが、俺がその組織の一員じゃないってのは、俺本来の体を見れば一目瞭然の筈だ…」

「本来って、それがアンタの本当の体じゃないのかい？」

俺は、その犬耳美人さんの言葉に対して、首を軽く横に振り、それ

を否定した後、  
俺とレイについての話しをする…が

「この体…もといレイは、俺本来の体がダイブって言う能力で操ってるんだ。遠隔操作が可能だから、俺の本体はここから遠い場所にいる…そこでだ、お前等二人を俺の本体に案内したいんだが…どうだ？」

能力については真実しか言っていないが、  
最後がかなり強引になった…  
さて、どう答えがくる…

「……貴方の話を聞いてて、1つ答えて無いのが分かった…」

「？……ああ、俺本来の名前か…レイを操ってる俺の名前は「弥生和正」次いでに言えば、レイって答えたのは、このロボットの名の事だ。まあ、答えて無いのは確かだが、それ以外は真実しか言っていないし、知ってる事も言った。誓ってもいい（ジュエルシードの事は名前しか知らないからな…）」

この金髪少女は本当に細かい事を覚えてるな…  
内心かなり驚いたからな、今の…  
と言つか本命の返事は？

「……分かった。付いていく…でも、変な行動をしたら直ぐに墜とすから…」

「分かった。肝に命じておく。」

俺はこの返事を聞いた時、無理矢理逃げるのは止めようと誓った…

## 第8話（後書き）

読んでくださった感想はどうでしょう？

フェイトの性格が多分変わっていたのですが、お分かり頂けましたか？

（分かりづらい文章力ですみません…）

フェイトの性格や行動が原作と違う部分は他人を更に疑い・信じてない性格。

そして、母親への愛されたいと言う気持ち（「ジュエルシードを更にムチャをして集める等…」）が、変わっています。

ですが、優しい心だけは変わっていません。

あ、それから和正が倒れた理由は話に出てきた通り”精神ダメージ”が原因です。

攻撃を受けたのは「軽く背を押されたあの時」です。

あれは、鎌の攻撃が少し深めにかすったのを、和正そう勘違いしたのです。

（少し後になりますが、和正も気付きます）

それでは、後書きもそこそこ…

感想やご指摘は、してくださると幸いです。

## 第9話（前書き）

更新遅くなりすみません…  
やはり駄文ですが、  
見てくださると幸いです。

## 第9話

フェイトと呼ばれる少女。アルフと呼ばれる犬耳＋犬の尾を付けた女性、

今現在、場所をあの高級マンションから外に移し、  
レイの出した提案通りに、その本体の元に”空に飛翔しながら”向かっていた。

そして、その案内をしているレイはと言うと…

フェイトと呼ばれる少女の胸の辺りで抱き抱えられていた…

レイ（和正）サイド

……先に言っておくが、

今の俺の状況がラッキースケベとかでは無いからな…

こんな状況が好きな奴らはロリコンか変態ぐらいしかいないだろ？

（またはその両方の性質を持つ奴かだ…）

俺はもちろんそんな性質は持って…え？ロリコンじゃないが変態だろって？

あれは誤解なんだ！！

見に覚えの無いゴ・カ・イなんだ！！

それに解けてない謎だってある！！

そうだな…あれは俺の正じゃ……（ブツブツ…）

………はっ！危うくまた考え出すところだった…

よし、話を俺の現状に戻そう…

いま俺は、金髪の少女に抱き抱えられながら、俺の本体が居る場所

「私立聖祥大付属小学校」

に空を翔びながら案内している。

と、ここで、何故俺がこの少女に抱き抱えられ、尚且つ自分で空を翔んでいないのか？

と疑問に思ったその貴方。

それは、俺の提案をこの2人が承諾した後の事だ…

回想……

（ん？待てよ？今アンタ墜とすって言わなかったか？もしかして空から落とすって意味じゃないよな…）

（…空から落とすに決まってる…地上移動だと時間がかかるし、何より、貴方とこうして話してる間に、貴方の本体が逃げ出してるかもしれないから…）

（いや、レイを動かしてる時は俺の本体は動けな…っておいおい！粹なり掴むな！しかもまだ話は終わって！……本当に空に翔べたのか…）

回想終了…

と、言う事が起こり今に至る訳だ…

多分、半ば強引だったのは、

俺の本体が、こうして自分達と話をしている間に何処かに移動する  
のでは？と思った、

この子の内心の焦りなんだろうな…

（そう言えば、この子にそれを伝えるのを忘れてたな…）

まあそれでも、俺が知らない空中浮遊を粹なりする辺り、  
どれだけ大人びて見えても子供は子供… ってやつだ。

ああそれと、空にこの子が浮いて飛翔した時は少し驚いたよ。

まあ、あの化けカマキリ＋光る刃＋縄を見てなかったら、今頃大騒  
ぎしてたかもな…

（何でこんな子が空飛べんの！？って言う風な感じで…）

まあ神様からも一様、

アニメの世界に転生させるよ、とは聞いて、

そのアニメの簡潔なサラツとしたあらすじを聞いたが…

本当に簡潔過ぎて詳しく分かってないからな…

聞いた意味を成してないって言うのが正直な所だ…

と！話しが脱線してしまった。

まあ、今そうやって俺は、

この少女に抱き抱えられつつ案内してる訳で…

……と言うか、もう眼下に捉えてる訳なのだが…

「アンタ等、見えてきたぞ。あれが俺の本体が居る学校って言う建  
物だ…」



「……あの建物に本体が……私達はこのまま空に居る。もし貴方の言った事が全て本当なら、貴方はこの能力を解ける筈…この学校に本当に貴方の本体が居るなら、屋上から姿を現して私達に合図をして…」

子供は子供…と言ったが、この子は頭がやはり良い…

俺の言ってる事が実は全て嘘で、

自分達が学校の屋上に降りた瞬間に奇襲にあつたら…

てことで降りないんだろうな…

（とことん信用されてないって実感するな…ん？でも待てよ…此処まで来るのにも一樣リスクが付いてたのに、どうして俺の提案を受けてくれたんだ？……分からね…まあ今はそんなのは置いて…）

と言う訳でここは…

「ああ、分かった。まあ3分も掛からない筈だから、待っててくれ。それじゃあダイブを解くからな……………」

そこで俺はダイブを解き、自分の体に精神を戻した……………

とあるクラス内

そこには、第三者から見れば

ただ、机に突っ伏して寝ているとしか見えない少年が1人ポツン…と、そこに存在していた。

だが、実はこの少年は今日、色々な非日常的な事を体験してしまった者だったりする…

そして、ずっとそうやって寝ていた？少年は……

「……………はあ、やっと元の体に精神が戻った……」

と、1つため息を吐きつつ、俯かせていた顔を上げる少年……

「弥生和正」

がそのクラス内に居た。

「……………何でか知らないが、少し節々が痛む……あの化けカマキリに受けた精神ダメージが原因か……それとも、バニングスの奴が寝てる俺を叩いたかのどちらかな……」

和正は、自分の体に精神が戻った直後に感じた、

これまで感じた事がない、微妙な体のダルさ＋痛みに対して、腕を軽くグルグルと回しながらそう呟いた後、

あの金髪少女が待つ屋上に向かう為、

机の横に引っ掻けてあるランドセルを左手に持った後、

そのままこのクラスから走り去った……

もうお気づきかもしれないが、

和正が走り去ったあのクラス内には、和正以外に生徒が居ない。

と言う事は詰まり、和正は授業を全てある意味でサボり、

しかも授業が全て終わり、生徒が全員帰った後にも居続けた事になる。

そしてまさか、

この事のせいで和正がある人物に肅清？されるとは、  
今の和正には考えられなかった……

和正サイド

さて、屋上に続くドア前まで来た…

走ってここまで来たから、ちょい疲れたな…

まあ後は、俺の目の前にあるこのドアを開ければ…

ギィィ…

……まあ、一樣俺も屋上には来たことはあるからな、  
やっぱ広い……

おっと！確か上空に居るんだったよな…

俺は屋上に出た後、

屋上の上空に眼を向けた…すると…

（まあ待っててくれてよかったよ…おっと、そう言えば合図しない  
とな…大声でいいのか？）

合図って言われてもこれしか思い付かないな…と言う訳で…

「おおーい！！犬耳美人さーん！！金髪少女さーん！！俺だ！！弥  
生和正だ！！もう降りてきていいぞー！！」

よく考えたら俺、あの2人の名前知らないからな…

俺の心の中の名称で呼んだが、通じ……

お！きたきた…ってなんか降りてくるスピード速い！！

しかも俺の所に来てるような!?

「大声で叫ぶんじゃないよ～～!!!!」

ええ!? 駄目だったか!?

つてうわ!!!?

「チツ! 避けるんじゃないよ!!」

「待て待て!!! 大声で合図したのは謝るから、上げた拳は納めてくれ!! オワツ!!」

「うるさい! アンタなんて本体さえ見つけちまえば後は!!」  
「止めて、アルフ…」で、でもさ、フェイト…」

あ、危ない…

フェイトって言ったか?

このアルフって言う犬耳美人さんを止めてくれてよかった…  
もう少しで思いっきりあの拳でブツ叩かれてた…

てん? 金髪少女が俺の方に向かって歩いて来て…  
…粹なり杖を向けるな、一瞬ビビったぞ…

「……………魔力反応無し……………」  
????

魔力反応? と言うかこの子は今なにをした? と言うかされた?  
あつ、と言う間に終わった様な……  
と言うか、これで疑いは晴れたのか?

……一様

「…なあ、これで疑いは晴れたのか? よく分からないんだが…」

「確かに、貴方の疑いは晴れた……疑ってごめんなさい。でも、私達にもこうしないといけない理由があった……」

「おいおい、別に気にしてないから頭を上げてくれ……女の子に頭を下げられてもいい気分しないから……」

それに、ある意味この子より歳上の俺が  
歳下のこの子に頭を下げられても困るからな……

「……許してくれるの？あんなに貴方に酷い事をしたのに……」

「酷い事？君がした事は問答と、肉体……と言うよりは、レイのボディ、その体に君は攻撃しなかった……（脅しはしてたけど、俺的には許せる範囲だったので許す）だから謝らなくていい……」

「……許してくれてありがとう。……それじゃあ、私達はもう……」

そうあの子は最後に小さく言った後、  
後ろに方向転換して少し歩き、  
体を浮かせて空に飛び、そのまま雲の中へと消えた……  
でだ……

「あなたは行かないんですか？えー、アルフって言いましたか？」

「もちろん行くさ……ただ、その前に……えと……その……ご！ゴメン  
！粹なり殴り掛かったりして！」

ん？以外だな……

律儀に謝ってくるなんて……

まあ、何にせよだ…

「大丈夫です、もし殴られてたら許してないと思いますが、実際は殴られた訳じゃないので、気にしてません。」

「ほ、本当に気にしてないのかい？」

「はい、気にしてません。」

「……………ありがとう…アンタ優しいね…」

「俺が優しい？それはありえませんよ…ただ俺は、俺の身に起こった事を元に気にしてないって言ってるんです。身に起こった事が酷ければ怒ってますし…」

「そうだとすると、アタシはアンタの事が、根本は優しいって思えるんだよ……それからアンタ、フェイトが居なくなってからアタシに対しての言葉が敬語に変わってないかい？」

「ええ、貴女の方が歳上ですから当然かと…」

「うお！ちよっ！敬語は止めてくれないかい！慣れてないから何か変な感じがするんだよ！」

ん？今時珍しいな…敬語を止めてくれなんて…  
まあ、そう言うなら…

「分かった。アンタがそう言うなら敬語は止めるよ…」

「た、助かるよ……………まあ、もうアンタと会う事もないかもしれないな

いけどね……」

「確かに……なあ、アンタ等の名前だけでも教えてくれないか？名前  
だけなら別に教えてくれても問題ないだろ？」

「うーん、まあ名前だけなら……アタシの名前は「アルフ」先に空  
に上がったちゃったあの子の名前は「フェイト・テストロッサ」……ち  
ゃんと覚えてたかい？」

「オーケーだ。覚えてたよ。」

「そうかい……話して分かったけど、アタシ、アンタの事はそんな  
に嫌いじゃないよ……そんじゃあね！」

最後にアルフはそう言った後、  
テストロッサと同じように雲の中に消えた……

（はあ……何とか一段落したな……てうん？何か忘れて………あ！？）

そう、俺はここで忘れちゃいけない事を忘れてた……  
それは……

「レイ返してもらってない……！！？！」

俺のこの悲痛な声は、雲までは届かなかった……

後にフェイトは、マンションに着いた後でその事に気づくが、  
自分達の立場上、空を飛ぶのはある反応を探す時か、見付けた時に  
しかしたくなく、

地上移動でなら外出は可能だが、今度はあの学校に行く為の道順を知らないで、

仕方なくフェイトは、

いつか返せれば…と思い、レイを家に置いておく事にした。

だがまさか、直ぐに返せる瞬間が案外速く訪れるとは、

今のフェイト達は思っても見なかった…



## 第9話（後書き）

かなり無理矢理な展開にしてしまった…

それと、本当に更新遅くなりすみません。

## 第10話（前書き）

作者のロボカスタムです！

2012年始まっての最初の更新です！

（今年も、やはり相変わらずの駄文ですが…）

それと、何と！この自分の小説！

魔法少女リリカルなのは。全長30cmのロボを操る少年。

のお気に入り登録が10を越え！！

更には1万PVを越えました！！

自分的には、既にこれだけで感無量です！！

これからも頑張りますので、よろしく願いします！

では、長ったらしい自分の話しはここまで…

それではどうぞ。

## 第10話

……いま俺は車の中に（強制的に）います…

えっ？急すぎて訳が分からないから今の状況を説明しろって？

……今の俺は説明すらしたくない程気分がブルーなんだよ……

（特にあの化けカマキリと会った所から、俺の運は地を通り越して地獄まで墜ちたよ……）

……お前の運やら気分はどうでもいいからさっさと説明しろってか

……

……しょうがない、じゃあ一度だけしか言わないし、

超、が付くほど簡単な説明しかないからな……

俺がテストロッサ・アルフと別れて、実はもう数日経ち、

色々な事があって今に至る……て訳だ…

………やっぱり超簡潔すぎて分からないよな…

面倒くさいが最初から説明するか………はぁ…

それじゃあ先ずは、テストロッサ・アルフと別れた後の話しからだ  
な…

まああの後俺は、レイの事はひとまず諦めて家に帰った…のだが…

俺が家に帰るなり、勇気が粹なり関節技を仕掛けてきたよ…

粹なりそれを仕掛けてきた勇気に、

関節技を掛けられながらも俺は、

どうしてやる！？と理由を訪ねると…

”門限破ったからその罰”

と、満面の笑みでそう俺に告げ、

その後俺は一时间程痛い目を受けた…

何時もなら門限を守るが、色々有りすぎた為にそれをすっかり忘れてた…

（次いでに家の門限は17時……1分でも遅れるとこの様な事になる…）

と、ここでこの話しは一旦終わり…（この後の話の続きは、俺の精神が語りたくないと言ってる…）

それじゃあ次は、俺がこんな状況になった話しだな…

今の曜日は世間一般で言う連休日だ。

普通なら、俺は今頃ダイブ……は一旦休んで、

P Pのモ ハ 3rdしてる筈なのに…

と言うか！俺がこんな事になったそもその原因は、

俺の姉のせいだ！！

あれは忘れもしない、連休日に入る1日前の話だ……

回想……

（和正「明日は海鳴温泉に行くから用意しときなよ」）

（勇気、母さんに伝えといてくれ。明日は俺は行かないって…あと！粹なり扉を開けるなって何度言ったら関節が！？）

（アンタも何回言ったら分かるのかな？私の事はお姉ちゃんて呼んで…）

（何故そう呼ばないと何時も間接技か拳骨が飛んでくるんだ！？と言つか！よく考えたら何故に温泉に行くん肩が外れる！？）

（まあ、私もその話を母さんから聞いたときは驚いたけど、詳しく聞いたら、この間母さんと由加と一緒にデパートに行った時に、丁度福引きをやってて、母さんが由加にやらせてみたら、温泉旅館に四名様ごあんなゝ見たいな物が当たったみたいよ？）

（何だその狙った様な景品は！？それから勇気！！関節極めながら涼しい顔して説明するなんか首がツ！？）

（うるさいよ、それで？行くの？逝かせてほしいの？どつちかな？）

（NOと言える余地が全くないが、俺はそれでも行かない！！「クギー！」ガッ！？！……）

（あらら…首の筋が違えちゃったかな？まあでも、このまま明日の朝まで寝ててくれれば”強制的に”連れていけるから、私的にはオッケーかな）

（……………）

回想終了…

……と言つ事があつた…はあ……

まあこれで、俺の今の現状は分かつたな…（俺が不機嫌なもの）

ついでに車の中には当然四人乗つていて、

運転席に母さん。

助手席に由加。

そして、後ろの座席に俺と勇気が座つてゐる。

（父さんが居ないのは”要人警護なる仕事”をしているからである。前に家に居たのは、珍しく仕事がなかつたからだ）

これであらかた俺の現状の説明はし終わつたな…

はあ…今さら俺がどうこう言つても現状は変わらないし、

仕方ないから、このまま温泉旅館に着くまで一眠りするか………Z

Z Z Z Z……

「海鳴温泉・とある旅館の駐車場」

（またまた）和正サイド

Z Z Z Z Z Z（ムニユ）……ん？何だ？この良い匂い+この柔ら

かい物は……

まさかまた母さんか？

「ほゝら和正 旅館に着いたから起ゝきて」

「……声真似しても分かるぞ、勇気……」

「あら？どうして顔も見えないのに、お母さんのことをゆうちゃん  
って思うの？お母さん知りたいな」

「……顔も見ずにお前が勇気だつて分かる点は2つある…1つは、  
母さんは怒ってる時以外で俺の事を”和正”って呼ばない事…2つ  
は、母さんの方が、お前より少し胸が大きいムガツ！？」

「うーん、声真似は完璧だったんだけど、まさかそんな2つの穴が  
あったなんて…特に最後のは……ネエ…（ギユウウ！！）」

「ムガ！…ムガガ！…ムガー！…（ゴメン！…胸の事は謝るから  
！…だから窒息死だけは！…！）」

ま！不味い！！力が弱まる気配が全く無い！？  
あ、ヤバイ…遠くにお花畑が見え……

俺が一瞬、

ああ、神様…もうすぐアンタの所に逝くよ…  
と人生を諦めかけたその時だった…  
女神の言葉が聞こえたのは…

「ゆうちゃん、カズちゃん起こしてくれた？」

「………うん 優しく起こしてくあげたよ、お母さん」

勇気は、運転席から顔をヒョコツと出してこちらを見る母さんに、  
そう言いつつ、満面の笑みで返した後、  
俺の拘束を解いた。

あ…ありがとう母さん…

危うく勇気の胸+腕に絞め殺される所だったよ…

（今ラッキースケベとか思ってた奴…前に出る…今なら勇気に頼んで至福の時に味わった後にあの世に逝けるぞ…）

……と言っか！

「起こすだけなら揺るとか叩くとか色々手段があっただろ！！ゆう……（クツ…）ね…姉ちゃん…」

ここで「勇気」と言えば、

また拳骨か関節技がくるし、話がややこしくなる…

しょうがないから、今だけ！！い・ま・だ・け！！”姉ちゃん”と言ってやる！！

（生前でも言った事の無い言葉……結構ハズイ…）

……て！？何で泣いてんの勇気！？

「うつ、うつ……うわ～ん！！和正が！和正がやっと私の事を”お姉ちゃん”って呼んでくれた～！！（ガシッ！）」

「うわっ！！どうしたんだよ粹なり！？……あっ…」

思い出した…

そう言えば勇気って……”シスコン”だった…

ああ、勘違いを防ぐために言っておくが、

勇気は、シスコンはシスコンでも”軽度のシスコン”だ。

具体的な説明は今が省くが、

こんな状況になったのはそれが原因だ。



はあ…でもこれじゃ、当初の目的が意味を成さないな…

俺が、勇気に抱き付かれながらそう考えていると、  
運転席の母さんが…

「ゆうちゃん、カズちゃん。そうやっているの良いんだけど、そろそろ荷物を持って旅館に行きたいんだけどな」

と言うと、

それを聞いたのか、勇気はスウ…と抱き付くのを止めて俺から離れ…

（グイ…）

「うを！？ね、姉ちゃん！腕をなぜ引つ張「何故って…一緒に外に出るためだけど、出ないの？」うっ…出るけど…」

な、なんでだろう…

今一瞬、勇気の小首を傾げた仕草にドキツとした…

（まあ、よく考えれば顔は綺麗だし、全体的なスタイルも母さんに負けず劣らず…これはモテる筈だわ…）

てか、姉ちゃんって呼んだ後から、

勇気の俺に対する言葉使いと接し方が全然違う…

……………まあ、今はこれでいいか…（下心はまっつたく無いからな！）

そうして俺は、勇気に手を引かれながら車から外に出て、次に母さん。更に続いて由加が車から外に出てきた。

「うん、みんな降りたね。それじゃあ旅館に行こっか」

母さんは俺達にそう言った後、車の中にあつた、そこそこに荷物が入ったカバンを手に掛けて、宿泊先の旅館へと足を運び、

俺達は、その母さんの後を歩いて付いていった。

由加が、俺と勇気が手を繋いで歩いている（俺としては物凄く恥ずかしい）光景を見て、

少しムツとして、母さんの空いてる手と、

自分の手を繋いで一緒に歩いたのは、語らずとも分かる……事か？

「海鳴温泉・とある温泉旅館内」

弥生家一同（父不在）の皆は、宿泊先の旅館に既に到着し、

今は旅館内の部屋……には居らず、

男：女と書かれた暖簾の前で、

小学三年の男の子と、高校2年の女性が言い争い？をしていた…

「ほら、お母さんと由加も先にお風呂に行っちゃったよ？」私達も行く？」

「いやいや！！俺は男だから男湯の方に行きたい」「私と入るの、そんなに嫌？」うつつ！？いや、そうじゃない……んだけどそうじゃないような……」

そう…言い争い？をしている2人の人物は、  
和正と勇気だった…

何故2人がこんな話をしているのか？  
それを今、説明しよう…

4人は温泉に入る為ここまで来て、  
和正が男湯に1人で入ろうとしたところ、  
勇気が”1人だと寂しいだろうし、一緒に入る？”と言ったのが事  
の始まり…

和正は”年齢で引つ掛かるから女湯は入れない！！”

と言ったのだが、雪菜が

(ここは”九歳以下なら男の子でも”女湯に入れるよ)

と言い、和正に退路が無くなり、  
今に至るわけだ…

「ほら！早くお風呂に入らないと、お母さんも由加も上がっちゃう  
よ？」

「いやいや！ちよつ！ちよつと待つ！！(うわ~~~~！？？誰か助け  
てくれー！！)」

女湯(桃源郷)の方へとズルズルと腕を引つ張られる和正は、  
声にならない叫びを最後に発すと……

それは、和正にとっては”ある意味”最悪の結果で叶った…

「あゝ！さつきから何か聞き覚えのある声がすると思ったら”ゆう

”だっ たんだ!”

と、声の質から言つて女性だと分かる声を発し、  
勇氣と和正の後ろから、友達に話し掛ける様に話し掛けてきた人物  
は、

丸い眼鏡を掛け、  
長い黒髪を三つ編みにした、

”勇氣の大親友・高町美由希”がそこにいた。

「えっ!” みゆ”もこの旅館に居たの!? 凄い偶然だね!”

勇氣はそう言いつつ、美由希の居る方に体を向け、  
その後、ペチャクラと2人で会話をし出した。

すると、和正の腕を掴んでいた手の力が弱まり、  
その瞬間を和正が見逃す訳もなく、  
お喋りに夢中で勇氣が気付かない事を確認した後、  
和正は、勇氣に捕まれていた手を離し、  
そのまま男湯の方に行こうとした……その時だった…

美由希の背に隠れて見えなかった”人物達”が声を掛けたのは…

「あーへん…じゃなかった! 弥生君!?”

「あっ……………」

「あっ!?”何で此処に”変態”が居るのよ!?”

和正は、その”聞き覚えのある3人の女の子”の声を聞き、男湯の暖簾を潜る一步手前でフリーズし、ギギギ…と頭をその声が出た方に向けると…案の定、そこには和正のクラスメイトである、

”高町なのは”

”月村すずか”

”アリサ・バニングス”

の三名が、そこには存在していた…

## 第10話（後書き）

うん！和正が羨ま……ゲホン！ゲホン！  
いえ！何でもありません…

「（??）いや、確実に羨ましいって言ってるだろ…」

なっ！？どこから声が！？……って、お前は！？

「（和正）ああ、そうだよ…自分で言うのもなんだが、この小説の主人公”弥生和正”だ…」

そうそう、この小説の主人公の………て！？待て待て！！  
何でお前1人がここに居るんだ！？

ここは自分しか居ない空間の筈なのに！？

「（和正）ん？誰が”1人で来た”って言った？」

えっ？？

えっ？？今なんと言っ…

「（和正）おい、”みんな”ここに入ってきてもいいってよー」

「「「それじゃ！おじゃまします！」「」「」

ドカドカドカドカ！！

（複数人の足音）

「（なのは）わゝ、凄い！こんなにお節料理がある所見たこと無い

よ！」

「（由加）うわ、スゴイスゴイ！！ねえねえおかあさん！！これ食べて良いの！！」

「（雪菜）うゝんまだ駄目だと思うから、食べちゃ駄目だよ由加ちゃん。」

「（勇氣）そうそう、駄目だよ由加。料理を食べる前に、先に”作者”からお年玉貰わないと」

ええ！？お年玉狙い！？

「（忠成）…勇氣、ふざけるな…「はゝい（結構貰う気はあったけど…）」作者…すまないな、家の勇氣がいらぬ事を言った…」

ああ、いいですよ。気にしてませんから…

（一瞬、本気でお年玉あげないといけないかなって思ったけど…）

「（美由希）私、今回の話しで出てこれてよかったゝ！じゃないとここに出て来れてなかったよゝ」

「（すずか）ねえねえ、アリサちゃん。このお節料理って手抜きじゃないよね？」

「（アリサ）分からないわね…でも、多分手抜きだと私は思う…だって…」海老が無い”もん…”

ドキッ！！

「（アルフ）クンクン、うゝん 美味しい匂いがするねゝ！ほら！  
フェイトも早くこっちにおいでよゝ」

「（フェイト）あつ！！ま、待ってアルフ！！もしかしたら睡眠薬  
がその料理に入ってるかも！！」

いやいや、入ってませんよそんなもの…

てか！！何でこの空間にこんなに人が入って来てるんだ！？

「（和正）ん？それはやつぱり”この小説で出てきた全員で新年の  
挨拶をする為”じゃないか？」

……… ああ、成る程…

ん？それなら”レイ”と”ランス”は何処に？

「（和正）ああ、それならここに居るぞ？」

「（レイ・ランス）……………」

……… まあ、無言なのは分かるが、  
何故にダイブもしてないのに独りでに動いてるんだ？

「（和正）それは、今だけバージョンの自動起動型にしてるからだ」

ああ、それなら納得。

……… それでは！この小説を読んでくださる読者の皆さま方に、  
この小説で出てきた全員で！！

「…………… 新年！明けましておめでとぅございまゝす！！！！」



「  
「  
「  
「

（その後、しっかりお節料理は頂きました…）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4591y/>

---

魔法少女リリカルなのは。全長30?の口ボを操る少年

2012年1月1日23時52分発行